

研究ノート

社会学的エッセイ (その4)  
——コミュニケーション・ルールを考える——

片 桐 新 自

Sociological Essays (4):  
On Rules of Communication

Shinji KATAGIRI

**Abstract**

The basic unit of society is social action, which naturally creates interaction. In that sense, it is not too much to say that society has been formed by human relationships. Rules of communication and social manners are necessary for smooth relationships.

Many of rules are not defined by law, but are the natural result of local customs. They change with the times. I consider from a sociological standpoint what rules of communication and social manners are necessary to live well in Japan society today.

Keyword: rules of communication, social manners, human relationships

抄 録

社会の基本単位は社会的行為であり、それは自ずと相互行為を生み出す。その意味では、社会を形成しているのは、人間関係であると言っても過言ではない。その人間関係をスムーズに行うために必要なのが、コミュニケーション・ルールであり、社会的マナーである。それらの多くは法的に定められたものではなく、慣習として自然にできあがったものであり、時代とともに変化していくものである。現代の日本社会でうまく生きていくために、どのようなコミュニケーション・ルールや社会的マナーが必要なのかを、社会学的立場から考察する。

キーワード：コミュニケーション・ルール、社会的マナー、人間関係

〈目次〉

はじめに

- 第1章 ちゃんと卒業することの大事さ (2003.1.30)
  - 第2章 形の大切さ (2003.3.21)
  - 第3章 匿名コミュニケーション (2003.8.20)
  - 第4章 二人席のマナー (2003.10.14)
  - 第5章 メールは1往復半が基本 (2003.11.25)
  - 第6章 毒舌擁護論 (2004.1.12)
  - 第7章 遊びにも頭を使おう! (2004.4.27)
  - 第8章 気配り +  $a$  (2004.5.18)
  - 第9章 親しい友人の意見はどの程度参考になるか? (2004.7.19)
  - 第10章 何も起きない幸せ (2004.10.23)
  - 第11章 自らを表現すること (2005.5.1)
  - 第12章 タイミング (2005.5.13)
  - 第13章 人間の本能 (2005.8.30)
  - 第14章 思いを伝えることの大切さ (2005.11.3)
  - 第15章 「道楽人生」ならぬ「働楽親成」 (2006.1.13)
  - 第16章 就職活動と左手薬指の指輪 (2006.3.24)
  - 第17章 点的知識を線的・面的理解へ (2006.5.22)
  - 第18章 人間観 (2006.6.30)
  - 第19章 現代夫道鑑 (2006.10.3)
  - 第20章 脱「かわいい」しよう! (2007.1.16)
  - 第21章 社会学専攻出身男性は結婚相手にいいかも? (2007.2.17)
  - 第22章 都会の年配者はマナーが悪くないだろうか? (2007.4.27)
  - 第23章 理想は専業主婦!? (2007.5.11)
  - 第24章 有休を取ろう! (2007.5.18)
  - 第25章 ついに使ってしまった (笑) (2007.6.8)
- おわりに

はじめに

この「社会的エッセイ」シリーズは、私のウェブサイト (<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~katagiri/>) で公開したもので、活字として残しておきたいものを時期ごとにまとめて発表しています。「その1」と「その2」では、社会全体や社会制度について述べたものを、「その3」と本稿である「その4」は、変化していく個人の生き方についてまとめています。本稿は、時期的には2003年から2007年にかけて公開したもののなかから、個人の生き方に関わるものを選びました。結果として、コミュニケーションのルールや社会的マナーについて書いた文章が多くなりました。インターネットや携帯電話といった新しい情報機器の普及や、価値観の変化などで、コミュニケーションのルールやマナーは急速

に変化してきています。最近「キレル中高年」が増えているそうですが、こうした中高年齢層の「キレル」という行為は、新しいコミュニケーションのルールやマナーに対応できずに、従来通りのルールやマナーを押し通そうとすることによって生じていることも多いように思います。変化するコミュニケーションのルールや社会的マナーを知ることで、世の中は生きやすくなるはずですが、もちろん変わるルールやマナーがすべてよりよいものになっているわけではありません。時代の変化を踏まえながらも、残すべきルールやマナーもあるはずですが、社会生活を送る上で誰もが考えなければならないコミュニケーションのルールやマナーをいろいろ考えてみたいと思います。各章タイトルの後に入れてある日付が、サイト上で公開した日を示しています。一応、公開順に並べてありますが、個々の章は独立していますので、興味をもった章から読んでいただいても構いません。

## 第1章 ちゃんと卒業することの大事さ（2003.1.30）

今年に入って朝日新聞が「おとな新世紀」というタイトルで、かつて「不惑の年」と言われた40歳が、今は「大人」と言えるのかどうかという問いかけをしています。問いかけをしていると言っても否定的という感じではなく、「大人だ」という自覚を持っていない40歳も悪くはないというトーンが濃厚に出ています。これは、何も朝日新聞だけが変わった主張をしているわけではありません。今の時代は、かつてと違い、こういう年齢の人ならこんな風に生きるべきだという年齢にもとづく規範が非常に緩やかになっています。いや、緩やかになっているという言い方は適切ではないでしょう。むしろ規範に従って生きていない人の方を、「いつまでも子どもの純粋な心を持ち続けている、夢を持った人」などというプラス評価をする雰囲気すらあるような気がします。怪獣マニアの41歳、アイドルの追っかけを続ける40歳、ディズニーランド・フリークの39歳、キティちゃんが大好きな38歳、こんな人たちがあちこちにいます。こういう人たちをかなりの変わり者だと思う人でも、「結婚適齢期」なんて言葉は否定するでしょうし、「もういい年なんだから××なんてやめなさい」なんて言われ方をしたらきっと反発するでしょう。「大人になりたいくない」という心情が「ピーターパン症候群」という病名のような言葉で表されて流行したのは、20年近く前だったように記憶していますが、今やこんな心情は当たり前すぎるほど当たり前のもになっており、誰も「病気」の一種とは思わなくなっています。

確かに平均寿命ものびていますので、40歳と言っても人生の折り返し地点をようやく過ぎたかどうかの段階なのだから、「不惑」にほど遠いのも当然なのかもしれません。しかし、

「不惑」は無理でも、現代の40歳にも40歳なりの生き方があってしかるべきだと思います。そして、それは、それなりの「大人」としての生き方でなければならないと思います。何をして「大人」というのかは難しいですが、子ども時代に好きだったものをひとつひとつちゃんと卒業していくことができなければ、「大人」になっていくことはできないでしょう。怪獣もキティちゃんもミッキーマウスもマンガもTVゲームも、小さい時は皆それなりに心を惹かれるものかもしれませんが、やはりいつかは卒業していくべきものです。好きだったらどんなものでもいくつになっても卒業しなくていいという考え方が肯定されていると、新しい他の魅力的なものに目を向けることもなく、その人の成長は滞ってしまいます。マンガもおもしろいとは思いますが、もういい歳だし、マンガは卒業して小説でも読んでみようかと思って、小説を読み始めたら、そのおもしろさに気づいたなどという体験も、とりあえず「ちゃんと卒業しよう」という気持ちがない人は、経験しにくいことになります。結婚だって同じことかもしれません。大好きな親と一緒に暮らしているのが一番楽しいのだから、それ以外の生活をどうして考えなければいけないのと聞き直したら、間違いなくシングルが続きます。そうではなくて、もうそれなりの歳だし、結婚を考えるべきだろうと思って、相手を探せば、それなりの誰かと出会う確率は高くなるでしょう。

時代とともにある程度内容が変化するのは当然ですが、だからと言って、年齢規範が消失してしまっても構わないとは、私には思えません。むしろ、あまりにルーズになってきている年齢規範の再構築が今の時代には必要なのではないかと思います。ちゃんと卒業すべきものは卒業して、次の段階の役割をしっかりと受け止めて生きていくことが、人には必要なことなのです。

## 第2章 形の大切さ (2003. 3. 21)

歳を取ってきたせいかもしれませんが、場に求められる形や形式というものは大事にすべきだという思いが、年々強くなってきています。昔から、そういうものを強く否定する気はなかったのですが、伝統的な形にきちんと合わせられるほどの知識もなかったし、「儀礼主義者」とか「形式張っている」と批判的に見られるような気がして、あまり形や形式には囚われない方がいいのだろうと漠然と考えていました。転機は、結婚した頃からでしょうか。結婚式と披露宴という人生でもっとも儀礼的な行事を、私は伝統的な形式で行いました。父親の名前で招待状を送り、媒酌人を立てた神前結婚で、披露宴の最後は新郎の父親の挨拶で終わるといった形式です。同年代の人でも、自分たちの名前で招待状を送っ

たり、最後に自分で挨拶をするといった新しい形を取る人もいました。私が伝統的な形式で行ったのは、その時はただその方が面倒ではないと思ったからでした。しかし、結婚するといろいろと形式を求められることが増えます。姻戚関係の法事は、自分の親戚関係の法事より、形式に則ることが必要とされます。また、子どもが生まれてからは、お宮参り、お食い初め、七五三等々、形式に沿わなければ、やる意味もないような行事が次々出てきます。いい歳になっても、そうした形式に合わせた行動ができないと、自分自身が恥をかきだけでなく、周りに不愉快な思いをさせることになります。

そうした経験を経るうちに、私は日常的な場面でも形式は大切だと思うようになってきました。もちろん、100%儀礼だけでは、心が込まらなくなってしまうかもしれませんので、形式に則りながら心を込めることが大切だと思っていますが、心さえ込もっていればどんな形でもいいのだとは思いません。通夜や告別式に冗談ばかり言って笑いを取ろうとする人はまずいないと思いますが、「ハレの日」の方は形式をわざと壊そうとする人が結構います。格調のない結婚式や乱れた成人式は今や当たり前になってしまいましたが、大学の卒業式などでも場をわきまえない人がかなりいます。卒業生自身が、着ぐるみを着たり、騒いだりするの眉をひそめなくなる行動ですが、私よりも嫌いなのが、送り出す側の教師が形式を無視した行動を取ることです。特に常識を疑うことに日々精進している社会学者に多いのかもしれませんが、「卒業式のような形式張ったことは大嫌いです」といったような挨拶をする人がしばしばいます。うけを狙っての発言なのかもしれませんが、「ハレの日」の門出を飾るにふさわしい言葉を期待して待っていた学生にとっては、そんな挨拶が嬉しいはずはありません。大学教師たるもの、ハレの門出にはそれにふさわしい挨拶ぐらいすべきだと思うのですが、この考え方は古臭くておかしいでしょうか？

### 第3章 匿名コミュニケーション（2003.8.20）

こんな面白みのないホームページ（以下、HPと略）でも、どこで知ったのか、たまにまったく知らない人から「HPを見ました」というメールをもらうことがあります。それは嬉しいことなのですが、どうも苦手なのが、自分自身の紹介をせずに、メールを送ってこられるケースです。名前もなかったり、下の名前だけということも多いです。別に、住所と電話番号を書いてほしいなんて思いませんが、フルネームとどういう団体に所属する人間か、どういう経緯でこのHPにたどりついたのかぐらいの情報は示してほしいものです。せっかくメールをもらったのだから、返事を書こうと思うのですが、相手の情報が少なす

ぎると、うまく返事が書けないのです。相手がどういう人で、どうしてこのHPに関心を持ったのかといった情報が最低限でもないと、的はずれなことを書いてしまいそうで、筆(?)が進みません。

でも、こういう感覚はもう古いのかもしれませんがね。匿名の相手とでも気楽にコミュニケーションが取れないと、今の時代にはついていけないのかもしれませんが。以前、「社会学について教えて下さい」と匿名で質問をしてきた人に、聞きたいことがあるなら自己紹介をしてからにしてくださいと返事を返したら、「それなら結構です」というメールももらったこともありました。昨年行った大学生の意識調査でも、面識のない人と「メル友」になれると答えた学生が3割もいました。私のHPではできませんが、他のHPで掲示板があるところなどは、ほとんどみんな匿名(あるいは「ハンドルネーム」)で書き込みをしています。「匿名コミュニケーション」が一般化している時代なのでしょう。私の知人の社会学者は、4つのメールアドレスを持っていて、そのうちの一つは女性になりきってメールをしていると言っていました。つまり、名前を名乗っていても、架空の人間を演じることもできるというわけです。そんな時代なんですね。

でも、私自身はこの「匿名コミュニケーション」(あるいは「架空名コミュニケーション」)には抵抗し続けようと思っています。匿名での発言はやはり無責任だと思います。たまにかの有名な「2ちゃんねる」なども覗くことがあるのですが、読むたびに、匿名性に隠れた悪意を感じます。自分の名前を名乗って発言できないようなことは基本的に発言すべきではないと思います。いろいろ批判したいこと、言いたいことは誰でもあるでしょうが、自分の言動にはきちんと責任を取るという姿勢で、自分の名前を名乗って発言してほしいものです。これは、新聞社に対しても言いたいと思っています。日本の新聞記事は、記事を書いた記者名が匿名になっているものがほとんどですが、あれも匿名性に隠れて言いたい放題になっていると感じることがしばしばあります。新聞も署名入り記事を原則にすべきです。複数で担当した場合は、複数の記者の名前を記せば済むはずですが。匿名は卑怯な感じがしてなりません。

#### 第4章 二人席のマナー (2003.10.14)

携帯電話の使用、化粧、食事など、公共交通機関で守るべきマナーについては様々な議論がなされています。もちろん好感を持てる行為ではありませんが、マナーはある程度変化していくものですから、あまり目くじらを立てることもないだろうと、日頃は私も気に

しないようにしています。しかし、先日続けざまに我慢しきれない気分させられました。最初は、バスの二人席で隣に座った女性がファンデーションから塗り始めて「フル装備」をしていた時です。公共交通機関で化粧をするという行為は、周りにいる人間を感情をもった他者として意識しないことによって行いうる行為です。例えば、密かに片思いをしている人が目の前に座っていた時に、こういう行為をなしうるかどうかを考えてみてもらえば、いかに通常は一緒に交通機関に乗り合わせた他者を意識していないかがわかると思います。私も横にずらっと並んだ座席の対面あたりで「変身」プロセスを見せられるぐらいなら距離もありますので、気にせずにいることができます。しかし、バスの二人席です。嫌でも気になります。「あなたなんか、私にとって意識するに値しない人間なのよ」と行為によって示されるいるようで、かなり不快でした。もしも男性がバスの二人席でスポーツ新聞のポルノ欄を見ていたら、女性は不愉快な気持ちになると思いますが、同じようなものだと思います。（ポルノ欄をこれみよがしに読む行為はわざと行っておりそばにいる女性の反応を楽しんでいるという説もありますが、多くの場合、周りの女性たちの感情を意識せずに行われている行為だと思います。）

バスの化粧は結局我慢したのですが、新幹線の二人席ではついに注意をしてしまいました。隣の女性が携帯メールをしていたのですが、ボタン確認音をOFFにしておらず、ボタンを押すたびに電子音がしていたのです。しばらく我慢していたのですが、なかなか終わらないので、「すみませんが、ボタン確認音を消してやってもらえませんか」と言ったところ、とても嫌な顔をしてすぐに携帯メールをやめてしまいました。そんなに不当な注意をしたわけではないと思うのですが、相手の受け止め方は「なんであなたにそんなことを言われなければならないんですか」という感じでした。この2つの「事件」を通して思ったことは、二人席のマナーは、一般的な公共交通機関のマナーよりかなり厳しく考えるべきだということです。非常に近接している分だけ、相手の行為が意識されがちです。6～7人掛けの座席で隣り合わせた時も距離的には同じくらい近いですが、二人席の場合は2人だけのある種の閉鎖性があるために、隣り合わせた人に対する心配りがより一層必要だと思います。

## 第5章 メールは1往復半が基本（2003.11.25）

先日、ある友人が「メールで質問されたことに答えてやったのに、それに対して『ありがとうございました』という返信が来ないのは失礼だ」と軽く腹を立てていました。この

感覚は私もよくわかります。「質問→回答→御礼」でやりとりは完結するのです。もしもこれが対面状況でのやりとりなら、余程変わった人でない限り、この1往復半をしているはずで。口頭でもメールでも心地よい相互作用の原則は同じだと思います。しかし、メールはその場で顔が見えないせいか、最後の御礼をしない人は確かに多く見受けられます。「1往復半」が基本だと広く認識してほしいと思います。なお、この1往復半のルールは、質問でスタートするときだけに適用されるものではなく、一般的な内容のメールでも適用されるべきだと思っています。返信を期待せずに初めてのメールや久しぶりのメールを送ったところ、思いかけずに返信が来たといった場合には、やはり「返信ありがとうございました」という御礼メールを書いて初めて完結されるべきです。片道ではもちろん相互作用にはならないし、1往復だけでは両方が納得のいく形での完結にはならないのです。1往復半が心地よいメール・コミュニケーションの基本ルールだということがもっと一般化してほしいと思っています。

## 第6章 毒舌擁護論 (2004.1.12)

私はしばしば「毒舌家」だと言われます。自分ではそんなつもりはないのですが、確かに他の人が心で思っても言わないでいるようなことを言うことは多いようです。ただ、開き直りと言われそうですが、「毒舌家」であることはそんなに悪いことではないのではないかと考えています。というのは、私にとって、毒舌とは状況に応じた的確な鋭い一言のことだからです。毒舌を吐くには、的確な状況判断力と高い言語能力が必要とされます。それゆえ、「毒舌家」というレッテルを貼られると、半分評価されたような気持ちになっています。確かに、鋭い毒舌は、時に言われた相手にとっては手厳しい一言となり、人間関係が悪くなることもないわけではありません。しかし、そうなることを怖れて言うべき事を言わないで、いつもオブラートに包んだような当たり障りのない会話をしていたのでは、決してその人との関係性が深まることはありません。それゆえ、逆に人間関係を深めたくないと思う人に対しては、私は毒舌を吐かず当たり障りのない会話で終始します。ただ注意してほしいのは、混同されがちですが、毒舌は暴言とはまったく異なるものだという事です。暴言は、毒舌と違い状況に合わない不適切な発言です。そうした発言は百害あって一利なしです。しばしば「毒舌家」と言われる人の中に、単なる「暴言家」が混じっていることがあります。状況判断力と適切な言語表現力に欠けた「暴言家」ではなく、的確な状況判断力と適切な言語表現力を持った「毒舌家」というレッテルなら今後

も貼られ続けたいものだと思っています。

## 第7章 遊びにも頭を使おう！（2004.4.27）

私のゼミのモットーは「学遊究友」（学べ、遊べ、究めよ、友と）なので、ゼミでよく遊びます。でも、この遊びというのは、学ぶこと以上に難しいのではないかと常々思っています。しばしばゼミに入った学生が、「勉強はだめですが、遊ぶのは得意ですから、任せてください」と言いますが、これまで任せられるなど思った学生にはわずかしか出会っていません。20人程度の集団でも、みんなに楽しかったという気持ちをもってもらうためには、かなりの工夫が要ります。この工夫がしっかりできていないと、時間だけがだらだらと過ぎていくこととなります。ゼミで遊ぶのは、集団としての連帯感を増したいからですが、だらだらと行われるイベント性の低い遊びは、むしろ気怠さを醸成し、集団の結束力を弱めます。ある意味で、遊ぶときの方が勉強するとき以上に、頭を使わなければならないのです。勉強は他者の関与の程度が低い作業ですが、遊びは他者関与度が非常に高い作業です。というか、多くの人にとって楽しい遊びとは、基本的にコミュニケーション・ゲームのはずです。それゆえ、相手（集団のメンバー）がどういう人間で、何を好むのか、どういうことならおもしろがってくれるのか、現在はどんな状況か、などをしっかり把握していないと、楽しい遊びは作り出せません。逆に言えば、楽しく遊べたときというのは、イニシアチブを取る者がしっかり企画して、みんなを楽しませる工夫をしていたときに限ります。リーダー1人だけでなく、こういうことを理解できているメンバーがそろって遊ぶときなどは、至福の時間が過ごせます。こうした遊びができたときは、集団の結束力を高めるなんてちゃちな計算を超え、人生が豊かになったということすら実感します。こうしたすばらしい遊びを味わうために、遊びを企画する人は、そしてそれに参加する人は、精一杯頭を使いましょう。こうした遊びが作り出せる人間になれたなら、まちがいなく社会で通用します。

## 第8章 気配り+α（2004.5.18）

「リーダーは気配りと強引さを合わせ持っていなければいけない」というのは私の長年の持論ですが、最近の若い人たちはあまりリーダーになりたがりませんので、こういう発言を私がしても「自分には関係ないことだ」と聞き流されてしまっていることも多いよう

に感じます。そこで、新しいキャッチフレーズを考えてみました。「気配りと笑顔があれば人間関係は必ずうまく行く」です。なあんだ、そんなことなら言われなくてもわかっていますと、みんな言いそうです。じゃあ、実践できていますか？仲のよい友だちとの間でできていますなんていうのは、できているうちに入りません。堅苦しい場面でも、知らない人がたくさんいる場面でもできていると言える人のみ、実践できている人と認めたいと思います。笑顔の効果はみんな知っています。アイドル歌手も、政治家もみんな笑顔で写真に写ろうとしますし、チアガールやエアロビクスのダンサーは踊っている時は、どんなにしんどくても笑顔を絶やさません。そんな特別な人の例を出さなくても、みんな写真を撮るときは「はい、チーズ！」ですから、よく理解できると思います。中には、どういう笑顔がもっとも魅力的に見えるかを鏡の前で日夜研究している人もいるかもしれません。でも、ここぞという時以外でも、笑顔で人と対応できているかという、みなさん自信はありますか？「作り笑顔」と非難する人がいるかもしれませんが、私はいつも笑顔でいられる人は高く評価します。嫌なこと、緊張すること、いろいろなことがあるでしょうが、そんなときでも、笑顔を絶やさずにいられる人はとても魅力的です。逆に、笑顔が少ないので損をしている人もしばしば見かけます。たとえば、先日運転免許証の書き換えに警察署に行ったとき、対応してくれた女性警察官がまるで笑顔で対応したら損をするとも思っているのかと疑いたくなるほど、機械的な顔と口調で事務的に対応しました。ずっと笑顔でいてほしいとは望みませんが、「はいこれで結構です」なんて言う時ぐらいは、笑顔を見せてもいいんじゃないかなと思いました。大学で学生と会ったときも、笑顔で挨拶してくれると、とても幸せな気持ちになります。

まあでも、笑顔はわかりやすいし、作るのもそう難しくはありませんが、上手な気配りとなるとそう簡単ではありません。とにかく相手に気を使えばいいんでしょうなんて言う人は、気配りなんか全然できていません。気を使っていることを相手にどれだけ気づかせないかによって気配りのレベルは変わります。気を使われていることに気づいてしまったら、申し訳ないなという気持ちになって、相手の気配りを単純に享受できなくなります。相手ものびのび楽しそうに過ごしているなと思いながら、自分の方も楽しく過ごさせているような場合は、とても気持ちがよいものですが、後からよく考えたら、その状況は相手が最上級の気配りをしてきていたことによって生み出されていたなんてことがしばしばあるのです。両方とも気配り上手なら、その気の配り方は高度なものになり、第三者から見ると、「えっ、そんなことまで言い合っているの？」と心配になったりするようなざっくばらんな会話でも、おおいに楽しめたりします。もちろん、そうできるには、お互いに相

手のパーソナリティをよく知っていること、状況と相手の心理を鋭く見抜く賢さがあること、などが必要です。あまりよくわかっていない人や、鈍感な人が相手の場合は、あまり高度な気配りテクニックを使うと、ただ単に「何も気を使っていないずうずうしい人」と思われたりしますので、注意した方がいいです。いずれにしろ、TPO（時と場所と場合）をわきまえて気の使い方のレベルを上手に操作できる本物の「気配り」ができる人間になっておくに越したことはありません。そうなってれば、「+強引さ（=決断力）」でリーダーへ、「+笑顔」で人間関係の達人になれます。「気配り」「決断力」「笑顔」の3つとも揃えられたら、どんな道に進んでも成功することでしょう。

## 第9章 親しい友人の意見はどの程度参考になるか？（2004.7.19）

もうじき夏休みが来ます。秋になると3回生は就職のことも真剣に考え始めるようになるでしょう。まず最初に必ずやりなさいと言われるのが自己分析です。でも、自分のことはなかなか客観的にはわからないので、自分はどういう人間だと思うかと自分のことをよく知っている親しい友人に聞く人が多いようです。しかしここで、私はひとつの疑問を提示したいと思います。親しい友人に見えているあなたの姿は、初めて会った人やそれほど親しくない人にも同じように見えるものでしょうか？親しい友人は「おまえは誤解されやすい奴だけど、根はいい奴だよ」とか「ちょっと冷たく見えるけど、本当は暖かい優しい人間だよね」なんて言ってくれます。もしもこういう言葉で自分はちゃんと理解される人間だと思ふとしたら、あなたは甘すぎます。親しくなって初めてわかるような性格がいくら素晴らしくとも、就職活動ではあまり意味を持ちません。初対面でも10分も会話すれば自分の魅力は伝えられるという人間になっていないと、就職活動ではポイントになりません。第三者に自分という人間がどう映るかを知りたければ、親しい友人よりも、それほど親しくない知人の意見の方が参考になると思います。もちろん、仲のよい自分のことをよくわかってきている友人と一緒にいるのは気楽だし、心地よいものです。日常的には、そういう関係の中で気持ちよく過ごしていても構わないと思いますが、就職活動という厳しい社会の試練を受ける前に自分のことを知っておきたいと思うなら、親しい友人の意見ばかり聞いては痛い目を見erと思います。まったく知らない人に「自分はどう見えるか」と聞いても外見的な印象しか答えられないでしょうから、適度な距離のある知人にでも分析してもらうといいのではないかと思います。まあでも「傷つきたくない・傷つけたくない症候群」の若者ばかりの時代ですから、なかなかストレートに言ってくれる人は少

ないと思いますが……。

## 第10章 何も起きない幸せ (2004.10.23)

続けざまに自然の脅威を見せつけられる<sup>1)</sup>と、何も起きない平凡な毎日がいかに幸せなのかを、しみじみ感じます。別に何者かになれていなくても、大きな幸運が舞い込んでこなくても、仕事をして、お腹が空いて、ご飯を食べて、眠たくなって、自分のベッドで寝られる。これだけのことが、どれほど有り難いことか、豊かすぎる日本人でもこんなときなら考えられます。こういう非常事態の時だけでなく、毎日、何も起きなかったことを心から幸せと感じて暮らせれば、「悟り」の境地に達するのでしょうか……。煩惱にまみれた俗人はなかなかその域に達することはできません。頭でこうしたことを理解することはできるし、そうしたふりをすることはできますが、それではだめです。頭で考えて演じるのではなく、自然に心からそう思えないと、悟ったことにはならないでしょう。いつの日か、そんな域に到達してみたいものです。でも、努力してそこに到達するのではなく、日々の暮らしを送る中でいつのまにか自然にその域に到達していただきたいのです。著名な宗教家より、幸せそうにひなたぼっこをしているおばあさんの方が、私のイメージする「悟り」に近いような気がします。昼寝している縁側の猫もイメージに近い感じですが、彼らはもともと人間のような煩惱がないので、やっぱり違うでしょうね。何事もあるがままに受け入れる、そんな風に思える日がいつか来るのでしょうか。

## 第11章 自らを表現すること (2005.5.1)

私のように、様々な場面で自分をさらけ出している人間からすると、自分をうまく表現できないという人が不思議な存在に見えます。でも一般的には、私のような人間の方が珍しいのであって、自分をうまく伝えられないという人の方が多いのでしょうか。まさかできるのに、自分を表現しない方が得だと思っているわけではないですよね？授業（特に指名される可能性のある少人数授業）をやっていると、どうしてそんなに無表情な顔をして聞いているのかなと思わせる学生にしばしば出会います。わかっているのかいないのか、おもしろいのかおもしろくないのか、表情からまったく読み取れないという学生はよくい

---

1) 10月20日に台風23号が日本列島を縦断し、死者・行方不明合わせて98名を出し、10月23日には新潟中越沖地震が起き、死者67名を出した。

ます。確かに、反応のよい表情豊かな子には、こちらもつい指名して意見を聞いてみたくなりますから、もしかしたらそういう意欲を教師に起こさせないようにするために、長年かけて作り上げてきた表情なのかなと、時々思ったりするのですが……。

でも、あてられるのって、そんなに嫌ですか？何か言わされて恥をかくよりみんなの中に埋没している方が幸せですか？そんなはずはないと思うのですが……。少なくとも、大学の社会学の授業で議論をしているときに、たったひとつの正解なんてありません。間違ったことを言って恥をかくなんてことはほとんどありません。単純な意見でも素っ頓狂な感想でも何でも言ってみたらいいのです。それが素直に自分の心に浮かんだものなら、きっとあなたがそう言いたくなった原因は何かあるはずで、プロの教師なら、そこを拾って、うまく議論に持って行ってくれるはずです。

しかし、それ以上にあなたの発言が大事なのは、あなたという人間を周りのみんなが知るきっかけになるからです。自分という人間を表現し、周りに自分のことを理解してくれる人が増えたら、人生楽しいですよ。誰も自分のことをわかってくれないなんて最大の不幸だと思いませんか？「仲のいい人たちの中にいるときはすごくおしゃべりなんですが……」という人がよくいます。それは誰だってそうです。わかってくれる人と話すのはとても楽です。でも、そこに安住していたら、人間関係がなかなか広がらないじゃないですか。1回しか生きられない人生です。人間関係をいっぱい広げて、自分の理解者をいっぱい作った方が、絶対おもしろいと思います。「先生は自分に自信があるから……」と、誰かが呟いてる声が聞こえてきそうですが、私だってだめなところだらけです。そんなに自信家ではありません。でも、今更他の人間になれるわけではないし、今の自分なんかだめだ、嫌いだななんて言ってたって、何もいいことなんかありません。だめなところもあるけど、良いところもあるし、自分で自分のことを好きになって、その良い部分をなるべく出すようにしていくしかないんじゃないでしょうか。言語表現が下手でそこが自分で好きになれないなら、表情豊かに反応することから始めてみたらどうですか。少なくとも、無表情よりははるかに自己表現になります。ともかく、自分を表現し、多くの人に理解してもらうことは、楽しいことだということに、ぜひとも気づいてほしいものだと思っています。

## 第12章 タイミング（2005.5.13）

タイミングが大切だということは誰でもよく知っていることですので、今更ここで書くのもなんなのですが、ちょっとだけ面倒がってタイミングをはずしてしまったという経験

を私自身もたくさんしてきましたので、自戒を込めて書いておきます。タイミングをはずしたら、同じことをしてもまったく評価が変わります。逆に言うと、タイミングさえぴったりならたいしたことをしなくても非常に高く評価されます。社会学の専門用語で、「期待の相補性」という概念があります。これは、相互行為（相互作用）を行う両当事者に満足感を与え、良好な関係を形成させる上で重要な要素になるものです。Aさんが「〇〇という行動をすれば、Bさんは××という行動を取ってくれるだろう」と期待して〇〇という行動を行ったときに、BさんがAさんの期待通りに××という行動をすれば、両者の関係は非常に良好なものとなります。Bさん側から見れば、「〇〇という行動をAさんがするのは、自分がそれに対して××という行動を行うだろうと期待してのことだろうから、その通りにすればAさんを喜ばせることができるだろう」という期待をしての行動ということになりますので、まさに「期待の相補性」です。タイミングの話は、この「期待の相補性」の中には時間基準も重要な要素として入っていることに注目したのと言えます。Bさんが××という行動を行うとしても、それがすぐではなく大分後になってしまったら、Aさんとしては十分な満足感を得られず、Bさんとの関係も微妙になってしまいます。まさにタイミングをはずしたということになるわけです。

よくタイミングをはずしてしまう人の中にもいくつかのタイプがあるように思います。①相手が期待しているものを読み取れない「鈍い人」。②わかっちはいても面倒がってなかなか動き出さない「ルーズな人」。③完璧な行動をしたいと考えて動けなくなる「完璧主義者」。しかし、実は②も③も①の亜流と言えるかもしれません。②の人は時間に関する期待がどの程度のものかを正確に読み取れていないからルーズになってしまうとも言えますし、③の人はどうせ主観的にしか決められない完璧さなど相手はほとんど期待していないことを読み取れていないとも言えるからです。相手の期待がある程度読み取れるなら、完璧など求めずに面倒がらずにさっさと行動を起こすように日頃から心掛けたなら、高く評価されるようになるでしょう。

### 第13章 人間の本能 (2005. 8 .30)

人間の本能とはどんなものなのでしょうか。人間は学習能力が非常に高いので、ある程度の年齢以上になると、ほとんどすべての行動が知識と経験に基づいてなされているようで、本能に基づく行動はあまり見あたらないような気がします。もちろん、食欲、睡眠欲、性欲という三大欲求に基づく行動はしているでしょうが、三大欲求は本能なのでしょうか。

単に肉体的な不充足を補えというサインにすぎないのではないかという気がします。たとえ三大欲求が本能だとしても、それら以外にも人間にも本能があるのではないのでしょうか。たまたまTVであるいは町で動物たちの行動を見ていて、誰が教えたというわけではないのに、こんなことができるのは、まさに本能によるものなのではないかと感じることがあります。たとえば、ウミガメの子は卵から孵るとひたすら海に向かって這っていきます。雄犬に片足をあげておしっこをすることを教えた人（犬？）もいないでしょうし、それで自分の縄張りを明確にするのだということも教えられていないでしょう。みんな本能に基づく行動です。鳥はどうして交尾の相手を他の種類の鳥と間違えずに選べるのでしょうか。泣く以外何もできなさそうな生まれたての人間の赤ん坊も、母親のオッパイ（あるいはそれに類したもの）を吸うことはできます。あれは誰も教えていないのだから明らかに本能に基づく行動です。母親の方はどうでしょう。かの有名な「母性本能」は人間に関しては今やすっかり影を潜めてしまった感じですが、ほ乳類の雌が生んだ子を保護し乳を与えようとする姿を見るなら、人間にもやはり母性本能はあってもおかしくないのかなという気もします。異性を好きになるというのも、動物行動から類推すればやはり人間においてももともとプログラミングされた本能ではないかと思うのですが、これも最近では学習だと主張する人も結構います。脳が発達し、学習による知識、経験が圧倒的な影響を与えるようになっている人間においては、本能が見えにくくなっています。（中には、「本能が壊れている」という言い方をする人もいるようです。）でも、きっとゼロにはなっていないはず。「闘争本能」「群居本能」なんて言葉もあるのですが、そんな本能も人間にもあるのでしょうか。本能のままに生きるのがいいとは思わないのですが、本能が何かを知った上でコントロールすべきものをコントロールしながら無理せずに生きたいと思います。

## 第14章 思いを伝えることの大切さ（2005.11.3）

何かめったにできない経験、素晴らしい経験をしたときには、その時の思いを言葉にして記録したり、その経験をさせてくれた人に伝えたりしたくなりませんか。心の中で思っているだけでは相手にも伝わらないし、自分の記憶としてもすぐに薄れていってしまいます。小学校の時に、事あるたびにたくさん作文を書かされて嫌だったでしょうが、あれもやはり大切なことなのだと思います。たとえ強制であっても、大事なことを記録させる、文章化させる癖をつけさせることは大事だと思います。まあ、そのやり方があまりうまくないので、癖になるどころ、多くの子どもは作文嫌いになってしまうのでしょうか。しか

し、大学生ともなったら、強制されなくても言葉にすることができるはずです。「以心伝心」なんて余程の関係でなければ無理です。ちゃんと言語化して思いを伝えないと、何も思っていないのと同じことになってしまいます。思いがないならそれは仕方ありませんが、もしも思いがあるなら、ちゃんと言葉にして伝えるべきです。それができる人間とできない人間の評価は大きく異なってきます。ゼミの応募書類を書くのも、愛を伝えるのも、結局同じことです。どれだけ自分の思いをちゃんと伝えられるかで、結果は大きく変わってきます。文章を書くこと、思いを伝えることを面倒がらないでください。「ありがとう」は素敵な言葉です。でも、それだけでは足りないときもあります。何を自分は感じ、何をありがたいことだと思ったのか、言葉を尽くして語った方がいい場合もあります。日本には言語で明確に表現することを苦手と感じている人が多すぎます。思いをきちんと言葉にすることの大切さを改めて投げかけてみたいと思います。

### 第15章 「道楽人生」ならぬ「働楽親成」(2006.1.13)

先日卒業生から転職相談を受け、アドバイスをしようと考えていたときに、ふと新しい四字熟語を思いつきました。大学時代は「学遊究友」(学べ、遊べ、究めよ、友と)を目標してもらえばいいというのが、私の持論ですが、卒業後は「学遊究友」というわけにはいかないでしょう。で、「道楽人生」ならぬ「働楽親成」(どうらくしんせい=働き、楽しみ、親に成る)を目標にしたらどうだろうかと思いついたのですが、いかがでしょうか。フリーターやニートがまるで市民権を得たかのような世の中ですが、仕事をし、仕事以外の生活も適度に楽しみ、そしていずれは人の子の親となり子育てを味わうというのは、平凡ですが充実した人生になると、自分の経験から思っています。「自分らしさ」というマジックワードに振り回されて何か特別な人間になろうとしなくても、普通に生きても十分幸せになれる。また社会全体にとっても、世の多くの人々が「働楽親成」を目標として生きることにしてくれたら、社会は安定的に持続していくことができます。まあ親にはなろうと思ってもなれない人がいます(養子を取るという選択もあることはありますが、近年の日本では一般的ではないですね。もう少し一般化されてもいいように思いますが……)ので、必ずしも誰でもできる生き方ではないのかもしれませんが、とりあえず働くことと楽しむことのバランスを取って生きるとは、自分の意思でかなり実現が可能だと思います。平凡に50年生きてきた平凡な人間からの平凡な提案です。

## 第16章 就職活動と左手薬指の指輪（2006. 3. 24）

就職活動中の女子学生がリクルートスーツで左手薬指に指輪をしていたので、「それは面接の時はどうするの?」と聞いたら、「やっぱりはずします」という答えでした。そういう行動をとらなければならない社会は決してよいものではないと思いますが、自分をもっとも高く売り込みたいと思うときに、マイナスになる可能性のある要因を排除するのは当然の行動なのでしょう。左手薬指の指輪は、親密につき合っている異性がいることを示すものと解釈され、早々と結婚退職、あるいは出産退職をする可能性がある人とラベリングされ、投資効果が確率的には低くなると判断される可能性があるということを女子学生諸君は漠然とながらも確かに実感しているのでしょうか。でも、これって今の日本では女性のみにも適用される基準ですよ? 男子学生がもしも左手薬指に指輪をしていったら、人事担当者はどう解釈するのでしょうか? 女性とは逆に、早々と結婚したり、父親になることで、責任感を持って仕事をしてくれる、つまり投資効果は高い人間と判断されるのではないのでしょうか。一緒にいた男子学生は「そうでしょうか……」と不審気でしたが、実際のところどうなのでしょうね。もちろん、就職活動の時には男女を問わず左手薬指に指輪はしないものだという常識が厳然としてあるなら、男子学生でも常識に従わない変わり者=組織に適応しにくい人という解釈はされる可能性があるかもしれません。誰か試しにやってみませんか。ああでも、そのせいで落とされたなんて言われたら困るので、あくまでも自己責任でお願いします。

## 第17章 点的知識を線的・面的理解へ（2006. 5. 22）

Googleの活用本を読みながら、「すごいなあ。今はインターネットに繋がっていたら、何でも簡単に調べることができるなあ」と改めて感心してしまいました。『ウィキペディア（Wikipedia）』という百科事典もありますし、昔なら調べるのに手間がかかったことが、デスクの前においてあっという間に調べられます。携帯電話の検索機能もどんどん進化しているようですし、いずれ知りたいことは、なんでもどこにいてもすぐ調べられるようになります。このようにより短時間で簡単に調べられる時代になったわけですから、昔よりみんな知識が豊富になってもいいはずですが、でも、なぜかそんな気がしません。なぜなのだろうかと考えていたのですが、知識が点になっていてつながっていないということではないのでしょうか。英語でも辞書で単語の意味が調べられるからと言って、それだけ

で英語が理解できるわけでないように、様々な知識もその意味がわかっただけでは、十分理解できたことにはなりません。たとえば、「左翼」という言葉を理解するためには、政治史をはじめとして様々な歴史に関する知識が必要です。個別に得た知識を関連する様々な知識と結び合わせることで、知りたい事象の歴史や原因、影響などが総合的に理解できるのです。それは比喩的に言えば、点的知識を線的、そして面的に理解するという事象ではないかと思います。面として（＝総合的に）理解できたとき、はじめてその事象についてわかったと思えるのです。こうした理解ができるようになるためには、たくさんの知識が必要です。しかし、やみくもに知識を集めてもつながらないでしょうから、得た知識の中に気になる言葉を見つけたら、それを芋づる式に調べていくというのが、ひとつの知識の増やし方です（英語で言えば、類義語や関連語に関する語彙を増やすことに当たるとでしょう）。また、歴史的知識——特に近現代史——はすべての基礎になりますので、通史を知ることも必要です（英語で言えば、「ギリシア・ローマ神話」「キリスト教」「シェークスピア」）。あとは、社会学的因果連関（社会的要因の関連）を把握する力（英語で言えば、文法）を持てば、面的理解は決して手の届かないものではなくなると思います。関連づけ整理してインプットされた知識は、次の場面では自分の武器として使えるようになります。「トリビアの泉」という番組を私が高く評価しないのは、あそこで紹介される知識は確かにおもしろくつい人に話したくなるようなものが多いですが、ひとつひとつがまったくつながっていないためだと思います。書店でも最近は「つい人に話したくなる豆知識」といった「トリビアの泉」的な本が目につきます。こうした番組や書籍の潜在的逆機能として、知識なんてそんな断片的なものでいいのだと思う人をたくさん生み出しているのではないかということも気になります。

## 第18章 人間観（2006.6.30）

人間によって作られている社会を扱う学問では、どのような人間モデルを前提にするかで、まったく異なる理論が構築されることになります。経済学では、自らの利益を最大にするように行動選択をする「利己の人間（ホモ・エコノミクス）モデル」を前提にしていますし、パーソンズは自らに課せられた役割を遂行しようとする「役割人間（ホモ・ソシオロジクス）モデル」を前提に理論を構築しようとしてきました。社会学の場合は幅が広い（ディシプリンが確立していない？）ので、パーソンズのような過同調的な人間モデルが圧倒的に支持を受けているわけではなく、数理社会学などでは利己の人間モデルに近い合理的

な人間モデルを前提にしていますし、私は役割を引き受けつつその中で自らの満足度を最大にするように行動選択をするという折衷的な人間（ホモ・ソシオエコノミクス）モデルを支持しています。

まるで社会学論のような書き出しですが、ここで何を語りたいのかと言えば、学問上の人間観ではなく、現実生活における人間観についてです。より具体的に言えば、「人間性善説」と「人間性悪説」についてです。私は典型的な「人間性善説」派です。確かに世の中には悪い人もいますが、大多数の人は悪人ではないと思っています。そして、きっと多くの方は私と同じように「人間性善説」を支持しているとも信じています。しかし、時々「人間性悪説」派と思えるような発言をする人に出会うことがあり、ひどくげんなりした気分させられます。「人間性悪説」の立場に立つ人の発言を聞いていると、私とはまったく逆にたまにはいい人もいますが、大多数はいかに楽にうまく手抜きできるかばかり考えているということになります。まあ、考えようによっては、自らの利益の最大化のみを行動基準とする「利己的人間モデル」というのは「人間性悪説」に近いものとも言えるかもしれません。そう考えれば、そちらの方が大多数ということになるのでしょうか。でも、短期的な計算ではなく長期的な計算をしたときには、瞬間的に答えが出るその場での単純な損得計算の答えとは違う答えが出るのではないかと考えています。たとえば、他者の迷惑も顧みず自己利益のみを追い求めた場合、確実にその人は他者からの信頼を失い、次からは前と同じポジションには立てず、利益も得にくくなるでしょう。そうした長期的な利益も考えた場合、単純な「利己的人間」より、役割を踏まえた上でできることをやろうとする人間の方が結局得になるという判断ができるはずです。そしてそういう行動を取る人は決して悪い人ではないと思います。無償の奉仕などをできる人だけを「いい人」と思っているわけではありません。普通に他者に迷惑をかけずにやるべきことをきちんとやろうと思っている人というのが、私の考える「いい人」です。そういう風に考えれば、大多数がそういう人間だと考えるのは、それほど無理なことではないとわかってもらえると思います。

こうした「人間性善説」に立つことは、一般の人間関係においても大きな意味を持つと思いますが、人間を育てる仕事をしている親や教師にとってはより大きな意味を持つと思います。親が子を、教師が学生を「性悪説」で見るとき、ひたすら厳しくすることによって勉強させるという手段が選択されます。子どもの勉強部屋を「集中治療室」と呼び体罰も加えながら勉強させる、毎回出席を取ることで管理を強化し単位を与えないという脅しをかけることで勉強させようとするといったことが、当たり前のように行われるようにな

ります。私は、しつけでも教育でも、頑張った方が長期的に見た場合、結局自分にとって得になるんだということを、人は理解できる存在だと信じてやっています。学ぶことは楽しい、知識を増やすことは楽しい、能力を高めることは楽しいということを、大多数の子どもや学生もきっとわかってくれるようになって信じています。もしも少なからぬ学生が私語をして授業の妨げになっているとしたら、それは学生が悪いという以上に、自らの授業の提示の仕方がうまくないのだと考えなければならぬと思っています。(時には、学生の方に問題がある場合もあるとは思っていますが。) 大多数の人は、罰や強制というムチによって育つのではなく、愛や楽しさというアメで育つものだという考え方が、しつけや教育に携わる者には必要だと思っています。究極の理想はムチ0で済ませるのですが、これはやはり無理でしょうから、ムチ1、アメ9ぐらいで行けたら現実的には理想的かなと思っています。

### 第19章 現代夫道鑑 (2006.10.3)

かつて結婚した女性に期待される仕事を「さしすせそ」で表したのをご存知でしょうか。「裁縫・躰・炊事・洗濯・掃除」の5つです。今でも多少期待されているかもしれませんが、堂々と言う人はいなくなりましたので、いずれみんな忘れ去ってしまいそうです。他方で最近、既婚男性にはもっともっと家庭に協力的であれという声がよく聞こえてきます。で、この際、現代の既婚男性に期待される仕事を、「さしすせそ」風に考えてみようと思いました。「さしすせそ」ではなく、「しゃ、し、しゅ、しえ、しよ」ですが。「しゃ」は「車夫」です。時間のあるときならいつでも妻や子どものアッシー君ができるような男でなければなりません。「し」は「慈父」です。今どき雷を落とす厳しい父親は子どもから嫌われるばかりです。優しいお父さんでなければなりません。「しゅ」は「主婦」です。今どきの男性は買い物も洗濯も掃除も片付けも、家庭のことは何でもできなければ、一人前の家庭人とはいえません。自分も「主婦」だというぐらいの気持ちが必要です。「しえ」は「シェフ」です。料理もちゃんとできないといけません。ビール片手にTVでプロ野球を見ながら待っていれば、妻が食事を用意してくれるなどという時代はとうに過ぎ去りました。そして、「しよ」は「ジョブ」です。こんなに家庭で仕事が増えた男たちですが、家計の主たる担い手として稼ぐ役割から解放されているわけではありませんから、当然仕事もできてしっかり収入を得ないといけません。「車夫・慈父・主婦・シェフ・ジョブ」の5つができる男になること、これがこれからは求められていくことでしょう。

## 第20章 脱「かわいい」しよう！（2007.1.16）

今や、若い女性たちの間で「かわいい」は万能語です。なんでもかんでもプラス価値と思えるものを「かわいい」とレッテルを貼り、本来「かわいい」とは矛盾するようなものにまで「かわいい」を付けて「エロかわ」、「キモかわ」、「ブスカワ」なんて言葉までできています。さらに最近では、「かわいい」は「KAWAII」というアルファベット表記となって世界にそのまま通用する言葉になりつつあるようで、「かわいい帝国」の勢いは止まるどころを知らずという感じです。しかし、私はこの風潮には抵抗したいと思っています。別に「かわいい」ものや「かわいい」という言葉自体は嫌いではありませんが、それが本来適用されるべき範囲を超えて使われることに、さらには若い女性たちにとってすべての価値基準に優越する基準となってしまうかねない風潮に抵抗を感じるのです。赤ちゃんやペットは「かわいい」でしょうが、20歳を過ぎて、さらには30歳が近づいてきても、いつまでも「かわいい」と言われて単純に喜んでいるようではまずいと思います。最近では中年と呼ばれるような年齢になっても、ペットだ、キャラクターグッズだ、ジャニーズだと、「かわいい」ものを追っている女性も少なくないように思います。そういう人が子供の自立心を育てられるのだろうかと思うと、不安になります。もちろん、女性だけに子育ての責任があるなどとは毛頭思っていないですが、母親の影響力が大きいことも確かです。

「かわいい」という言葉には、「幼い」、「しっかりしていない」、「自分のコントロール下に置けそう」といったニュアンスが含まれています。しっかりと自立してスマートに生きている女性に対しては、「かわいい」とは言いにくいはず。浅田真央さんはまだ「かわいい」でいいかもしれませんが、荒川静香さんには「かわいい」は合わないはず。「素敵」とか「魅力的な」あるいは「大人の」といった形容の方がぴったりするはず。女性たちが、いつまでも「かわいい女の子」でいるのではなく、「素敵な女性」になっていかなければならないのだということを認識するために、また様々にある価値を「かわいい」ひとつで表現してしまう語彙の貧困と感性の枯渇を招かないためには、「かわいい」の乱用には「NO！」を言わなければならないのではないかと考えています。まあでも、今の流れから言えば、この闘いにはほとんど勝ち目はないでしょうね。それでも、この文章を読んでくれた人の1人でも2人でも、脱「かわいい」をめざしてくれることを期待して書いておきます。

## 第21章 社会学専攻出身男性は結婚相手にいいかも？ (2007. 2. 17)

ゼミの女子学生の恋愛話を聞いていると、しばしば「彼氏がちょっとは社会学を勉強してくれたらなあってよく思います」という発言が出てきます。その心は？と言うと、「女らしさ」の強制が時代遅れであることを認識してほしいということのようです。「女なんだから、こうすべきだ。こうしてはいけない」と、結構口うるさい彼氏が多いようで、オール（「オールナイト」の略語で「朝まで」の意味）で遊ぶな、男友達と遊ぶな、子どもが生まれたら仕事をやめて家にいるべきだ、といった発言がぼんぼん飛び出すようです。たぶん、そういう男性たちは、外見は結構いい男なのではないかと思います。男らしさの価値観を何の疑問もなく身につけているので、男らしくて頼りがいがあり、もてるタイプだからこそ、つきあいも始まったんじゃないかなと思います。でも、就職と結婚ということを真剣に考えるような年齢になると、格好良く男らしいという要素以上に、パートナーとしてこの人は本当に自分（女性）のことをわかってくれるのだろうかという疑問も湧いてくるようです。別にばりばりのキャリア・ウーマンになるつもりはない人でも、「産み育てる機械」<sup>2)</sup>だなんて思われるとしたら冗談じゃないという気分にもなることでしょう。社会学を学べば、ジェンダーの問題性ぐらいはわかるはずだから、「女だから……」なんて押しつけがましい発言はしなくなるのではと期待されているわけです。

確かにそうかもしれないなと思います。実際、余程不出来な学生でない限り、社会学専攻の男子学生は、そんな発言はまずしないように思います。また、卒業して家庭を持っている教え子たち（男性陣）を見てみると、家庭に実に協力的で家事も育児もよくこなしている人が多いようです。もちろん、ジェンダー論だけなら、社会学専攻でなくても学べると思いますが、社会学をしっかりと学ぶことによって、「わたし」を相対化してみる、つまり別の人間の立場に立って物を考える癖をつけ、正確な状況認識と適切な行動を行う力をつけ、さらにはマジョリティの志向性がどこに向いているのかを的確に把握できるようになれば、妻との関係だけでなく、子との関係、親戚との関係、地域・学校のあり方と対応の仕方、会社での生き方、等に関してもうまくやれるはずです。つまり、社会学をちゃんと身につけた男性は結婚相手にとてもよいということになりそうです。まあ、社会学を学んでも、自己改善できない人も結構いますので、社会学専攻出身男性がみんな結婚相手にいいということにはならないと思いますが、確率的には、結婚相手としての質は高い（稼

2) 2007年1月27日に、当時の柳沢伯夫厚生労働大臣が、「女性は産む機械」と発言したことがマスコミで取り上げられ問題となる。

ぐかどうかは知りませんが、パートナーへの配慮ができるという意味で）男性が多いのではないかと思います。

## 第22章 都会の年配者はマナーが悪くないだろうか？（2007. 4 .27）

マナーが悪いというと、すぐに若者がやり玉にあげられますが、実際はどうなのでしょう。私は都会の年配者のマナーは結構悪いような気がしてなりません。確かに、電車の床面に座り込んだり、臭いの強い食べ物を食べたり、フル化粧を始めたりといった行為はまずしませんが、気持ちをざらつかせる程度の「軽い」マナー違反は、かなり多くの年配者が悪びれることもなく行っているように思います。混んでいる通路でも道を譲ろうとしない、エレベータに後ろから割り込んで乗り込もうとする、降りるときにはボタンの近くにいてもさっさと降りてしまい「開ボタン」を押そうとしない、電車内でもおばさんたちが大声でお喋りに興じ、隣にいると本も読めないなんて経験を何度もしています。多くの若者はこうしたマナー違反はしません。道は譲ろうとする人が多いし、エレベータも順番に乗るし、ボタンのそばにいたら、まずほとんどの人がちゃんと「開ボタン」を押します。電車内ではほとんどがメールをしています、大声で喋っているおばさんたちより、公共空間での過ごし方としては迷惑ではありません。都会では新しい生活様式がどんどん生み出され、それとともにマナーも新しく生まれるので、年配者はついてこられないということもあるのだろうとは思いますが、しばしば自分は年配者なのだから、若者よりも優先されてもいいはずだという傲慢な態度を取る人も見かけます。マナー指標を作って20～30歳前半の若年層と、50歳代後半～70歳の年配層で比較したら、私は間違いなく後者の方がマナーが悪いという結果が出るような気がします。

## 第23章 理想は専業主婦!?（2007. 5 .11）

先日3回生ゼミで、女子学生諸君に「できることなら専業主婦になりたいと思っている人、いる？」と聞いたら、13名中13名が手をあげました。「えっ、全員なの？」と聞いたこちらがびっくりしてしまいました。確かに一時もはやされた「キャリアウーマン志向」は弱まっており、最近是我的ゼミでも毎年半数以上の女子学生が「できることなら専業主婦」として過ごしたいという希望を持っていることは認識していましたが、全員はちょっとショックでした。彼女たちに言わせると、「子どもが小さいうちは母親がそばにいてあ

げた方がいい」「学校から帰ってきたときに母親がいないのは寂しい」「誕生日会などもやってあげたい」ということだそうです。30年前に教育実習で高校に行ったときに、当時の高校生たち（今は40歳代後半になっている世代）と議論したときには、男子生徒がこんな意見を言い、女子生徒から「古臭い考え方だと思います」と言われていたことを思い出し、「うーん」と頭を抱え込みたいような気持ちになりました。しかし、彼女たちも何も深く考えずに幼い少女たちのように「お嫁さんになるのが夢」と言っているわけではないのだろうと思います。そこには社会の現実に対する彼女たちなりの分析があって自ずとその選択をしてしまったのだと思います。つまり、結婚し母親になることを自分の将来像として思い描いた場合、現在の社会状況から考えると、まだまだ家庭生活とフルタイムの仕事が無理のない形で両立できるというイメージは持てず、かといって「パート主婦」というのも理想的な姿とは思えないという現実認識が潜在的に作用して、「理想は専業主婦」という選択を導き出したのだと思います。ですので、さらに言えば、「理想はそうだけど、結局子どもが成長してあまり手がかからなくなったら、割がよくないパートでもきつとやっているんだろうな」という現実認識も合わせて持っているのだと思います。確かに、今の日本の仕事環境を考えると、彼女たちがそう考える（「理想は専業主婦。現実にはパート主婦」）のも仕方がないところかなと思いますが、なんだかあまりにも現状に迎合した発想になりすぎているようで、やはり少し残念だという気がします。

関西大学社会学部社会学専攻の女子学生諸君は、相対的に見た場合それなりに仕事もできる優秀な人材だと思います。単に女性の正社員として十分な仕事のできる人たちであるというだけでなく、そんじょそこの男性社員よりも余程仕事ができる潜在能力を持った人たちだと思います。ゼミでの活躍をみる限り、男子学生より女子学生の方がはるかにコミュニケーション能力も高いし気配りもできていますので、その能力はそのまま仕事でも活かせるはずで、これは大分以前からそうなっています。にもかかわらず、社会に出るからの成長度では女性陣は男性陣に完全に抜かれてしまいます。学生時代、頼りなくコミュニケーション能力も低かった男子学生が社会に出てから鍛えられてそれなりに仕事のできる人間になっているケースは多々知っていますが、女子学生の場合は少数を除いては、そういう方向への変化はあまり見ません。結局、最後は仕事に対する「覚悟」の違いかなという気がしています。もちろん、上で述べたように、現実の社会が男性には「覚悟」をするように後押しするのに対し、女性にはそんな仕事に対する「覚悟」なんかしない方がいいよと囁いているというダブルスタンダードを持っていることも大きく影響しているわけですが。しかし、システムがそうなっているから仕方がないと考え、そのシステムに自

分の身の丈を合わせようとしていたら、結局何も変わりません。システムに問題があるなら、最初のうちは多少しんどい闘いをしなければならなくとも、ぶつかってみる必要があります。1970年代以降のフェミニズム運動を支えてきた女性たちがそういうしんどい闘いをしながら、少しずつ制度を変えて女性も仕事をできる環境を作ってきたのに、この2007年という段階に来て、優秀な女子学生諸君がこぞって「理想は専業主婦！」と言い切ってしまうのはいかがなものかと、フェミニストではない私ですら思いたくなくなってしまいます。社会のせいばかりにはできない何か（「楽に生きられるなら楽に生きたい」という「ホンネ」）が、そこにはないだろうかと問いたくなります。

そして、女性たちが「社会のシステムがそうなっているんだから仕方がないじゃないですか」という「タテマエ」の理由を言って家庭に入ってしまうことによって、結局男たちは家計の唯一の担い手として過重労働をしなければならなくなり、また母親たちの「痒いところに手が届く」ほどのサービスを受けて育てられた子どもたちはワガママで、自己中心的で、自立心の弱い人間になってしまう可能性がさらに高まっていくという悪循環が起きるのではないかと心配です。女性たちすべてがフルタイムで働き続けるのは確かに今の段階ではあまりにも厳しすぎる闘いになると思いますので、一気にそこまでは行かなくても、とりあえず多くの女性たちが「専業主婦にだけはなりたくない」と考え、仕事（フルでもパートでも）なり地域活動なり情報発信活動なり、何か社会的関わりを積極的に持とうと思って活動してほしいと思います。子育ても大事な社会への貢献ですが、この便利になった社会においては、女性が自分の生活のほとんどすべての時間を捧げて行うべき「仕事」ではないと思います。（子育ての基本は自立心を育てることですから、手をかけすぎる子育てでは、潜在的逆機能を引き起こします。）近所の友達とゆっくりランチをとったり、テレビのワイドショーをのんびる見る余裕があるなら、何か仕事をした方がいいと思います。もったいないです。「男も女も家庭も仕事も」というのが私は理想だと思います。そこに向かうためには、女性たち（特に「楽したい」と思っている若い女性たち）の意識変容が必要だという気がしています。

## 第24章 有休を取ろう！（2007.5.18）

先日NHKのニュースの特集で「若者の過労死」が取り上げられていました。最近の論調で「若者と仕事」というと、「フリーターだ、ニートだ」と働かないイメージが流布されていますが、正社員になった若者が「酷使」と言ってよいほど働かされている現実があ

ることはあまり知られていないのかもしれませんが。私のゼミの卒業生もまじめな子が多いせいか、実際私が「過労」を心配するほど働いている人も結構います。「有休とか取れないの?」と聞くと、「病気なら別ですが、他の理由で事前に休みを取りますなんて、まず言えません」と口をそろえて言います。そういう人たちの多くが労働者の権利としてある年間の有休を消化しないまま放棄しています。(中にはそれでは会社にとって外聞が悪いので、会社の暇な時期を見つけて、まとめて取らせられたりもしているようですが……。)

私は第23章に書いたように、「男も女も仕事も家庭も」が理想だと思っていますが、それをよい形で実現するためには、過重労働はしない社会にしなければいけないと思っています。コストダウンばかり考えてアルバイト・パート・派遣を増やし正社員は減らしこき使う会社には未来がないという社会にしないと、みんな幸せになれません。サービス残業はしない、有休はきっちり取る、そういう方針でみんなが行動してほしいものだと思います。もちろん、そのためには時間内で必要な作業を効率よく終える能力の高さが必要とされると思います。日本の場合、あまり効率的に仕事を片付けられない人が残業もせず有休も消化していて、能力が高く責任感の強い人がサービス残業も多く有休も取らないというような奇妙な現実があるように思います。能力の高い人こそ、さっさと仕事を片付け、残業はせず、有休も取るという行動をしてほしいと思います。実際、卒業生たちを見る限り、有休を上手に利用し、無駄に残業をさせられていない人の方が人生を充実させて生きているように思います。民間企業で自分の好きなきに有休を取ることの難しさはわかっているつもりですが、みんなが周りに気を使ってこんな慣習を続けるなら、日本は幸せな社会にはなれないように思います。専業主婦やパート主婦である方が税金で優遇される措置をやめ、フルタイムで働く方が得という税制度に変え、なおかつ1人あたり労働時間は大幅に減らす(子育て期間中は在宅勤務もできるようにする)。そんな社会になれば、女性たちも「理想は専業主婦」とは言わなくなるのではないのでしょうか。「みんなが働きすぎずに働く社会」になってほしいと心から願っています。

## 第25章 ついに使ってしまった(笑)(2007.6.8)

メールによるコミュニケーションが一般化してすぐに広まった「(笑)」という記号使用に長らく抵抗してきましたが、ついに白旗を揚げ、軍門に下ることにしました。52歳にして、ついに「(笑)」を使い始めました。2000年初頭に、「(笑)って変じゃないですか?」(「KS たらたら通信」<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~katagiri/turatura/>第13号参照)という一

文を書き、強い抵抗感を表明しましたが、実を言うと数年前から、「ああ、ここで（笑）って入れると、ソフトな意味合いとして伝わるな」と思うようになっていました。しかし、「いやいやこんな記号に逃げてはいけない。ちゃんと文章で微妙なニュアンスも伝えられるはずだ」とやせ我慢をしてきましたが、1週間前についに使ってしまった。防波堤は1箇所でも崩れたらもう止めようもありません。すでに何度か使ってしまった。これからは、私からのメールに頻繁に「（笑）」が登場するかもしれませんよ（笑）。で、なんでこんなことになったのだろうと改めて冷静に考えると、今の時代がまるで「一億総傷つきやすいんです症候群」のようになっていて、物の言い方をすべてソフトにしておかないと危険な時代になっているからではないかと思います。若者たちの会話では、語尾を上げたり疑問形にして断定をしない言い方が一般化し、携帯メールのやりとりでは絵文字をたくさん使わないと怒っているのではないかと思われるという時代になっています。また、何かと言えば、「セクハラだ、パワハラだ」とクレーム申し立ても簡単になされる時代になっていますから、こちらも防衛策のために、なるべくソフトな物言いにしていく必要性が一段と高まってきているのだと思います。言い切ってしまうと、きつく取られそうな文章でも、最後に「（笑）」とつけるだけで、相手が受け止めやすくなるなら使った方がいいのだろうと、ついに私も判断を下したということです。時代に応じ、状況に応じて、信念は変えていくべきものですので、たぶんこれでいいのでしょう。

## おわりに

大学教師などをやっていて、いつも18～22歳の年齢層とつき合っていると、加齢の自覚が弱く、ついつい若者気分で行動してしまいがちです。その結果、教え子たちから、「先生は若いですよ」などと言われるわけですが、そういう言葉で喜んでいるだけではいけないと言われるたびに思うようにしています。なかなか老成しにくい立場ですが、たとえ青臭くても時には「頑固親父」となって言うべき事を言わなければならないと思うこともしばしばあります。特に、社会学という学問を専門としていて、常々人間行動の観察とその分析をしている人間なら、一般の人よりも多少なりとも人間が見えているはずですが、最近の若い学生たちは素直で従順で、友人を大切にするタイプが多いですが、仲間とっていない人間に対しては、視野に入らないのか、あるいは恥ずかしいのか、面倒くさいのかわかりませんが、関係性がよくなるための大事な行動をしないことがよくあります。こんな時はこんな風にした方がより関係性がよくなるのだということを、本稿を通じて学んでく

れる人がいれば、本稿はその狙いを達したと言えると考えています。

—2008.12.3 受稿—